

38 安中藩主板倉侯の種痘事業

清 水 英 一

牛痘接種法は一七九六年(寛政八年) エドワード・ジエンナーにより開発され、その有効性と安全性のため急速に各国に普及し、一八〇五年にはジャワにまで達していたが、長崎に輸入されるまでには更に四十年以上の年月を要した。

この間文政七年(一八二四) ロシヤに囚われていた蝦夷地の番人中川五郎治が牛痘苗を持ち帰り、蝦夷から東北の一部に種痘を施したが、他地方には広がらなかった。

二十五年の後佐賀藩主鍋島直正は伊東玄朴の進言により、藩医橋本宗建に命じてオランダ商館医オットー・モーンニッケを通じて、バダビアから牛痘痂を入手した。嘉永二年(一八四九) 宗建・モーンニッケ等は牛痘苗の種痘に成功した。痘苗は直ちに江戸藩邸の伊東玄朴に送ら

れ、又京都日野鼎哉・大阪緒方洪庵ら各地の蘭方医に分配された。しかし各地の漢方医特に江戸では、幕府医学館の抵抗によって、組織的な普及は見られなかった。

我々群馬県碓氷安中医師会史編集委員会は、幕藩時代の医療情勢を調査中の所、既に安中市文化財調査委員会が安中藩主板倉勝明が領民に施した種痘の記録を発見し、安中市史に記載されたので報告する。

其の一、五料茶屋本陣「お東」名主日記

昭和三十九年(一九六四) 安中市文化財調査員木暮勝弥の発見

安中藩では安政三年(一八五六) 四月から十月の間、領内五料村、松井田宿他八ヶ村にて、少くも二四五人の子供に種痘を施し、その後善感を再検診した。謝金は分限に応じて一人二〇〇文から一朱であった。これには藩医千木良昌達、津金元格と城下の町医久保庭元立の三人が、順次二人組として巡回した。

其の二、領内八本木村小林家文書

古文書同好会誌ハナミズキ所載、平成四年(一九九二) 小板橋喜子男発見

安政二年(一八五五)代官久保庭谷五郎が八本木村役人に、村内の二歳から十一歳まで九人の疱瘡前の子供を報告させた。之は前出「お東」名主日記の一年前の事である。

其の三、安中谷津矢野家の襖の下張り

平成六年(一九九四)安中市文化財調査委員、淡路博和発見

之は前出「お東」名主日記中の実施記録の郡方役人の公式報告であり、役所の体制が記録されている。即ち医師体制は前出の通り、その際郡方から石川氏、大熊氏、小野氏らが町方同心を召連れて出動し、城下・安中宿及びその周辺の村々に実施したが、特に三里以上離れた飛地の藩領六ヶ村の中の一つ、廣馬場村が記載されているので、領内全域にわたって役人による組織的な種痘事業が展開されたものと推察される。

其の四、安中原市宮口家文書

平成十二年(二〇〇〇)前出淡路博和発見

この新資料は安中藩の組織的な種痘事業の原点を確認出来る、極めて注目に値する貴重な発見である。

御 觸 書

一、植疱瘡之義ハ

殿様より被 仰出候事

被 仰付候 以上

医師 安中伝馬町

嘉永三 佐 仲

戌ノ春

この触れ書は嘉永三年(一八五〇)の春、牛痘接種法が長崎において、モーニツケから佐賀藩医榎林宗建に伝えられた翌年、江戸お玉池種痘所、大阪除痘所の設立からは、実に八年前早くも種痘事業が発足した事は注目に値する。藩主板倉勝明は甘雨亭と号し、数多の著書を残し、藩校を建てて俊英を養い、同志社創立の新島襄はその一人である。藩主は中風にかかり、伊東玄朴より診療を受けていたが、安政四年二月逝去した。安中藩の極めて早期の種痘が実施されたのは、この伊東玄朴との関係によると思われる。

(碓氷安中医師会会史編集委員会)